

1) 動脈瘤自体の描出に関しては、直径2~3cm以上の大きさのものではRIの動脈瘤へのpoolingを認めたが、それ以下の大きさのものでは描出されなかった。

2) 血管撮影上脳血管攣縮の強い症例では、RI angiogramで脳循環時間の遅延、perfusionの低下を認めた。しかし、血管撮影上、血管攣縮を認めなかったがRI angiogram上perfusionの低下を呈した例も1例認めた。

RI angiographyは脳動脈瘤の診断能は劣るが、くも膜下出血の急性期例で臨床的に重要とされている脳循環障害の診断および経過観察には非侵襲的検査であるRI angiographyは有用な方法である。

5. 突発性難聴における脳槽シンチグラフィの検討

富士	盛大	星	信
工藤	功男	淀野	啓
宮川	隆美	畠山	隆
西沢	一治	市村	博
篠崎	達世		

(弘前大・放)

神 廉

(同・放部)

伊藤 トシ

(同・医療短大)

1976年9月より1977年7月まで、突発性難聴17例にRI Cisternographyが施行された。正常型4例、異常型13例(内訳は、吸収遅延軽度6例、脳室内逆流持続性+吸収遅延著明3例、脳室内逆流一過性2例、患耳側からの脳表クモ膜吸収遅延またはblock2例)である。exploratory Tympanotomyは11例に施行しround window ruptureは8例に確認され、破裂修復したところ6例に聴力改善を認めた。シンチ所見により、破裂の有無または治療効果には一定の関連は得られなかった。またTympanotomy施行後聴力改善したシンチ所見では、正常型、吸収遅延軽度が多くTympanotomy

施行しない症例には、脳室内逆流持続型などの異常を呈した。以上突発性難聴には、内耳循環説、ウイルス説など種々の説があるが、シンチ上吸収遅延型などの異常が78%に認められたということは、少なからずCSFの動態異常があることを示唆する一因になっていると思われる。

6. ^{131}I による甲状腺癌肺転移の診断および治療経験

伊藤 博史 中村 護

菊池 章

(東北大・放)

高橋 弘

(いわき病院・放)

甲状腺癌の肺転移は胸部X線写真でかならずしも発見できるとはかぎらず、 ^{131}I によるシンチグラムで初めて発見できることがある。シンチグラムで転移部が描出されうるものは ^{131}I の大量投与の治療の適応となる。われわれは6例の治療経験を発表した。6例のうち2例は胸部X線写真で確認できなかった。6例は合計で275~711mci投与し、1日最高は150mciであった。3例が著効、2例は不変、1例は増悪。6例中4例が濾胞状腺癌、2例が乳頭状腺癌。肺転移をできるだけ早くシンチグラムを施行して発見し、 ^{131}I 治療を行うのが、よい経過となりうる。

7. ^{201}Tl の甲状腺シンチへの利用

筒井 一哉 佐藤 幸示

(県立ガンセンター新潟病院・内)

清水 克英 渡辺 清次

(同・放)

^{201}Tl chlorideによる甲状腺シンチグラフィによる悪性甲状腺腫9例(乳頭状腺癌7例、未分化癌1例、細網肉腫1例)、良性甲状腺腫7例について施行し有用性を検討した。

^{201}Tl は甲状腺を描出する核種として、また、Tumor Scanningとしての2つの有用性があった。

Tumor Scanning としては、悪性甲状腺腫全例限局性集積を認めたが良性でも7例中4例に認め、そのみでの良悪の鑑別は不可能であった。しかし、径3 cm以上の乳頭状腺癌と未分化癌は非常に強い集積をみとめた。一方、細網肉腫は大きいにもかかわらず、集積が弱かった。径1.5 cm以下の小さな乳頭状腺癌も陽性像が得られ、骨、リンパ節に転移していた3例はいずれも転移巣に一致し陽性像が得られた。一方、 ^{131}I シンチでヨードのとりこみのみとめられなかった3例は、 ^{201}Tl シンチで、未分化癌は形態不整の異常集積、良性嚢腫は欠損として、また、橋本病亜急性期患者はび漫性に強い集積をみとめた。

8. オートパック T₄ キットによるサイロキシンの測定

原 正雄

(山形大・3内)

抗サイロキシン抗体が測定チューブに固相化されているオートパック T₄ キットを用いて血中サイロキシンの測定を行なった。本キットでは抗体を加える必要がなく、BとFの分離はチューブ内容の洗浄吸引のみでよく、測定操作は簡単であった。

再現性は Intraassay, Interassay とも良好であり、希釈試験、添加回収試験とも満足できる結果が得られた。

本キットを用いての血中サイロキシンの正常値は $7.6 \pm 4.2 \mu\text{g/dl}$ ($M \pm 2 \text{ S.D.}$) であった。各種甲状腺疾患での本キットによる血中サイロキシンの測定は臨床所見とよく一致した。

本キットでのサイロキシンの測定の他の CPBA 法によるサイロキシンの測定結果と良好な相関を示した。

9. タリウム-201 による心筋シンチグラフィーの検討—右心室壁の描出について—

大和田憲司 舟山 進

池田 精宏 麻喜 恒雄

待井 一男 内田 立身

津田 福視 刈米 重夫

(福島医大・1内)

木田 利之

(同・放)

右心負荷を有する心疾患10例にタリウム-201による心筋シンチグラフィーを行い、その左前斜位30°および45°像における右心自由壁描出の有無と右室収縮期圧との関係のみた。右心自由壁は右室収縮期圧50~60 mmHg以上でよく描出された。また、ディスクに収集したシンチグラムから左心自由壁(LV)、心室中隔(IVS)、右心自由壁(RV)の各部にROIを求め、RV/LV、RV/IVSのカウント比をみると左前斜位45°にて描出群は平均0.78、0.78、非描出群は0.63、0.62と両群に有意差がみられ、右室収縮期圧とRV/LV、RV/IVS比との間には $r=0.96, 0.95$ と良い相関があった。左前斜位30°にて同様であった。次に肺でのカウントを用いRV/Lungとして相関をみたが $r=0.67$ とよくなかった。以上のことからタリウムによる心筋シンチグラフィーは右心負荷疾患の判定の指標として有用であり、RV/LungよりもRV/LV、もしくは、RV/IVS比を用いるのが適当と思われた。

10. ^{201}Tl による肺癌シンチグラフィー —胸部 X線像および ^{67}Ga との比較—

小田野幾雄 酒井 邦夫

北村 達夫 椎名 真

(新潟大・放)

長沢 弘 杉柳 勇

石井 博

(同・放部)

最近、塩化タリウムによる腫瘍シンチグラフィーが注目を集めるようになった。われわれは、本